

⑨ 日本国特許庁 (JP)

⑪ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報 (A)

昭58—177911

⑤ Int. Cl.³
A 61 K 7/00

識別記号

庁内整理番号
7432—4C

⑬ 公開 昭和58年(1983)10月18日

発明の数 1
審査請求 未請求

(全 7 頁)

⑭ 化粧品

⑯ 発明者 畑尾正人

横浜市港北区新羽町338資生堂
新羽花椿寮

⑰ 特 願 昭57—60726

⑱ 出 願 昭57(1982)4月12日

⑲ 出 願 人 株式会社資生堂

⑳ 発 明 者 斎藤力

東京都中央区銀座7丁目5番5
号

東京都世田谷区玉堤1—3—10

明 細 書

1 発明の名称

化粧品

2 特許請求の範囲

透明な化粧料基剤に、多層状に重ねた板状ポリマーを配合したことを特徴とする化粧料

3 発明の詳細な説明

本発明は、パール状の光沢を有する、外観が美しく、しかも目的に合わせてメイクアップ効果をも付与することのできる化粧料に関する。

従来、化粧料には種々の顔料や色材とともにパール顔料が配合されている場合が多く、きれいな色調とつややかな輝きを消費者に提供している。

パール顔料としては各種のものがあるが、いずれも次にあげるような欠点を有し、化粧料に配合するためには必ずしも満足のいくものではなかった。

例えば、天然の魚鱗箔は上品で均一性のあるパール光沢を有しているが、魚体から採集されるグ

アミンを主成分としているために極めて高価であり、しかも天然物であることから天候や魚の代謝異常等によりしばしば光沢が落ちてくるというような品質面でのばらつきが多く、パール光沢を持つ化粧料を安定して消費者に提供しようとする化粧品技術者の悩みの種であった。

オキシ塩化ビスマス、塩基性炭酸鉛もパール顔料として知られているが、耐光性、安全性に問題があり、化粧料への配合が望ましくないのは周知の事実である。

雲母・チタン系パール顔料は安価で安全性にも問題がなく、いろいろな平均粒径のものがある中で、要求されるパール光沢に応じて広く化粧品に配合されている。しかし、このものは平均長径2～100ミクロン、平均厚さ0.03～1ミクロンの範囲の中にあり、粒子径の巾が広く、光沢の点、例えば光沢の良さ、均一性で必ずしも満足のいくものではなかった。

本発明者らはこうした事情に鑑み、上記従来のパール顔料が持つ欠点を解決すべく鋭意研

究を重ねた結果、多層状になった板状ポリマーから得られた粉末を化粧料、とくに透明な化粧料基剤に配合したときは独特のオパール感のあるパール光沢を有する安全性の高い化粧料を得られることを見出し、本発明を完成するに至った。

すなわち、本発明は透明な化粧料基剤に、多層状に重ねた板状ポリマーの粉末を配合したことを特徴とする化粧料を提供するものである。とくに本発明は多層状になった板状ポリマーを透明化粧料基剤と組み合わせることにより、従来のパール顔料にはない、又、板状ポリマーを単なる化粧料に配合する場合には得られない独特なオパール様のパール光沢を^{発現}するものである。これは、多層状に重ねた板状ポリマーは従来のパール顔料が反射によりパール光沢を出すのに対し、回折によりパール感を感じさせるからであると考えられる。

以下、本発明の構成について詳述する。

本発明に用いられる透明な化粧品基剤は、透明油系、透明水系、透明可溶化系、透明乳化系、透明粉末系、透明粉末分散系など、どんなものでも

上記透明化粧品基剤は透明油系、透明水系、透明可溶化系に関してはさしたる問題なしに^{存在}できるが、透明乳化系、透明粉末系、透明粉末分散系を得ようとする場合には注意を要する。すなわち、透明乳化系は何らかの処方上あるいは製法上の工夫が必要であるし、又、透明粉末系及び透明粉末分散系を作ろうとする場合は基剤となる粉末の選択が重要である。本発明者らが実験を繰返した結果では、被覆力のある二酸化チタン粉末などではその配合量を^{5%}以下に抑えなければならなかった。タルクやマイカなどの透明感のある粉末の場合は、^{50~70%}（従って多層状に重ねた板状ポリマーは^{30~50%}）配合可能である。又、油分に分散するときにはタルクやマイカ^{40~45%}多層状に重ねた板状ポリマーの粉末を^{5~10%}配合し、この混合粉末^を同量の油分に分散すれば美しいオパール感のある化粧料を得ることができた。

本発明に用いられる多層状に重ねた板状ポリマーは、異なる2種以上のポリマーを多層状に重

よいが、次の方法で規定される透明度が30%未満

であると、独特なオパール光沢が得られない。

（透明度の測定方法）

白黒のカラーマッチングペーパー上に化粧料基剤を^{175nm}の厚さに塗布し、カラーアナライザーにて^{550nm}の分光反射率を測定する。以下の式で算出される数値を透明度とする。

$$\text{透明度 (T550)} = (1 - \frac{R_B}{R_W}) \times 100 (\%)$$

但し、 R_B は黒い紙に塗布した場合の^{550nm}の分光反射率であり、 R_W は白い紙に塗布した場合の^{550nm}の分光反射率である。

又、水系、可溶化系、乳化系の化粧料基剤などについては塗布後乾燥したものを測定、油系ワックス状のものについては溶解して塗布して冷却後測定、粉末系のものについてはネイルエナメルのカリアベースに10重量%分散したものを塗布し、測定した。

（以下余白）

ねたもので、樹脂の種類としては、グリセリン、トリメチロールプロパン、ペンタエリスリトール等の多価アルコールと無水フタル酸等の酸からなるポリエステル、その他のポリエステル、ポリスチレン、ポリメタクリル酸メチル、ポリメタクリル酸エチル等のポリメタクリル酸エステル、ポリアクリル酸メチル、ポリアクリル酸エチル等のポリアクリル酸エステル等のアクリル系樹脂、ポリ塩化ビニル、ポリ酢酸ビニル、ポリビニルアルコール、ポリビニルアセタール、ポリ塩化ビニリデン等のいわゆるビニル樹脂、ポリエチレン、^{ポリプロピレン}等のオレフィン系樹脂、^{ポリアミド}、フェノール樹脂等の樹脂が挙げられる。これらのうち共重合が可能なものについては共重合体も含まれる。

上記ポリマーの中、とくにポリエステル、ポリスチレン、アクリル系樹脂、ポリオレフィン、ポリ酢酸ビニルから選ばれたモノ、あるいはコポリマーが好ましい。

前記本発明に使用する多層状に重ねたポリマー

は、前記の各種ポリマーをフィルム状に多層に重ねたもので、その層の数は、任意に選ぶことができるが、例えば100～300層であり、その厚さは10～50μである。

本発明においては、前記多層状に重ねたポリマーを細断して所定の大きさにした粉末が用いられる。細断する方法としては、たとえば、バキュームプレート上にフィルムをのせてパンチングによりカットする方法がとられる。

前記本発明の粉末の粒径は任意に選ぶことができるが、例えば長径及び短径が0.05mm～1.0mmの角、円形、その他の粉末であり、常に粒径の幅が狭い一定範囲のものを得ることができる。

本発明において用いられる前記多層状に重ねた板状ポリマーの粉末は、市販のものから入手することも可能であり、たとえば、マール社(Mearl Co., LTD)製のスターライトグリッター(STARLITE GLITTER)が挙げられる。

前記多層状に重ねた板状ポリマーの粉末を前記透明化粧料基剤に配合する方法は、化粧料粉末の

ひとつの成分として、例えば従来のパール顔料がとられる方法で配合すればよい。配合量は従来のパール顔料と同様任意に配合できるが一般的には0.5～50重量%である。

本発明によって得られる化粧料としては、アイシャドウ、口紅などのメイクアップ化粧料、パックス、クリーム、化粧水、せっけんなどの基礎化粧料、あるいはヘアローション、ダスティングパウダー、ボディローション、練香水などのヘア、ボディ、芳香化粧料など多岐に渡る化粧料があげられるが、均一性のある優れた光沢性をもった、安全性の高い化粧料を提供する。とくに前記透明化粧料基剤中に配合するときには、単なる化粧料に板状ポリマーを配合した場合には得られない、又、従来のパール顔料の配合によっては全く不可能であった透明感のあるオパール様光沢を持った新規の美しい化粧料を得ることができる。又、本発明に係る前記多層状に重ねた板状ポリマーの粉末は従来のパール顔料に比較して比重が低いので、透明化粧料基剤に配合する場合にも基剤の増粘など

の必要が少なく、この意味からも本発明の化粧料への利用範囲は広いといえることができる。

(各パール顔料の比重)

スターライトグリッター	1.1～1.5
チタン・マイカ	2.8～3.7
ダアニン	1.7
オキシ塩化ビスマス	7.7

次に実施例によって本発明をさらに詳細に説明する。配合量は重量%である。

(以下余白)

実施例 1

アイシャドウ

	(重量%)
(1) ポリエステルポリメチルメタクリレート層状粉末 (スターライトグリッター)	40.0
(2) セレシン	10.0
(3) カルナバロウ	1.0
(4) 流動パラフィン	27.9
(5) スクワラン	10
(6) ポリブテン	10
(7) グリセリルモノステアリン酸エステル	1.0
(8) 香料	0.1

(製法)

(2)、(3)、(4)、(5)、(6)、(7)を加熱溶融させ(1)を添加分散させ、脱気後、(8)を添加混合する。80℃にて中皿に充填し冷却することによりオパール様光沢を有するアイシャドウを得た。

(以下余白)

実施例 2

アイシャドウ

	(重量%)
(1) ポリエステルポリメチルメタクリレート層状粉末 (スターライトグリッター)	40
(2) セレシン	10
(3) カルナバロウ	1
(4) 流動パラフィン	25.9
(5) スクワラン	10
(6) 微粒子状ケイ酸	2
(7) ポリブテン	10
(8) グリセリルモノステアリン酸エステル	1
(9) 香料	0.1

(製法)

(4)の18部と(6)をディスパーにて混合して透明状ゲルを作っておく。次いで(2)、(3)、(5)、(7)と(4)の残部を加熱溶解させ、これに透明ゲルを添加し均一に混合する。(1)を添加分散後脱気し(9)を添加混合する、80℃にて中皿に充填し冷却することにより安定なオパール様光沢を有するアイシャドウを得た。

(以下余白)

実施例 3 リップスティック

	(重量%)
(1) ポリエステル・ポリアクリル層状粉末	10
(2) セレシン	15
(3) ビーズワックス	10
(4) セタノール	5
(5) カルナバロウ	1
(6) 流動パラフィン	56.95
(7) 赤色 204 号	1.5
(8) 赤色 202 号	0.5
(9) 赤色 223 号	0.05
(10) 香料	適量
(11) 酸化防止剤	適量

(製法)

(7)、(8)を(6)の一部に加えローラで処理する(顔料部)。(9)を(6)の一部に溶解させる(染料部)。(2)、(3)、(4)、(5)、(6)の残部を混合し、加熱溶解後顔料部、染料部を加え、ホモミキで均一に分散する。分散後(1)を添加し型に流し込み急冷し、スティック状になったものを容器に差し込む。美しいオパール光沢を持つ半透明状のリップスティックを得た。

(以下余白)

実施例 4 バック

	(重量%)
(1) ポリエステル・ポリスチレン層状粉末	5.0
(2) ポリビニールアルコール	15
(3) カルボキシメチルセルロース	5
(4) グリセリン	5
(5) エタノール	10
(6) 精製水	60
(7) 防腐剤	適量
(8) 香料	"

(製法)

(7)を溶解させた(6)に、一部の(5)で湿潤した(2)と(3)を加え、70℃に加熱し、ときどきかきまぜながら一昼夜放置する。翌日(4)及び(5)の残部(1)、(8)を加え、均一に混合し、攪拌しながら冷却し、チューブに充填し、塗布したときキラキラしたかがやきを持ったバックを得た。このバックは肌に塗布し乾燥した後一枚の膜になったものをはがすピールオフ型のバックである。

実施例 5 ヘアローション

	(重量%)
(1) ポリビニルピロリドン	3.0
(2) プロピレングリコール	2.0
(3) ポリオキシエチレン(20モル)ステアリル アルコールエーテル	1.5
(4) エチルアルコール	10.0
(5) 精製水	78.5
(6) 香料	適量
(7) 染料	"
(8) 防腐剤	"
(9) ポリメチルメタクリレートポリオレフィン層状粉末	5

(製法)

(4)に(2)、(3)、(6)、(7)、(8)を加え溶解する。これに(1)を加え湿潤させ、かきまぜながら(5)を除々に加え、(7)で着色し(9)を分散させる。これを頭髮に使用した場合キラキラしたかがやきを有する。

(以下余白)

実施例6 (練香水)

	(重量%)
(1) 脱臭 ^臭 ビースワックス	10
(2) 固形パラフィン	15
(3) スクワラン	20
(4) 流動パラフィン	44.5
(5) ポリエステル、ポリメチルメタクリレート ^異 層状粉末 (スターライトグリッター)	0.5
(6) 香料	10

(製法)

(1)(2)(3)(4)を加熱溶解^融させ(5)を分散させる。脱臭後(6)を混合し適当な型へ流し込み冷却する。美しいパール剤がキラキラと点在する練香水を得た。

(以下余白)

実施例7 ダスティング

	(重量%)
(1) ポリエステル、ポリオレフィン層状粉末	99
(2) 香料	1

(製法)

(1)に(2)を噴霧し、均一に賦香した後、^ミ篩を通して容器に充填する。本品は身体、髪等に塗布し、キラキラしたかがやきを有するパウダーである。

(以下余白)

実施例8 クリーム

	(重量%)
(1) 固形パラフィン	10
(2) ビースワックス	3.0
(3) ワセリン	10
(4) 流動パラフィン	36
(5) ソルビタンセスキオレート	4.2
(6) ポリオキシエチレン(20モル)ソルビタンモノオレート	0.8
(7) 精製水	25
(8) ポリエステル、ポリオレフィン層状粉末	10
(9) 香料	0.5
(10) 防腐剤	0.1

(製法)

(7)を加熱し65℃に保つ(水相)。(1)、(2)、(3)、(4)、(5)、(6)、(10)を混合して加熱溶解し65℃に保つ(油相)。油相に水相を加え予備乳化を行ない、ホモミキサーで均一に乳化し、乳化後(8)、(9)を混合し冷却しながらかきまぜる。

(以下余白)

実施例9 透明石鹸

	(重量%)
(1) ポリエステル、ポリメチルメタクリレート層状粉末	15
(2) 牛脂	25
(3) ヤシ油	10
(4) 苛性ソーダ	6
(5) エチルアルコール	15
(6) 砂糖	9
(7) グリセリン	4
(8) 精製水	15
(9) 染料	0.01
(10) 香料	0.2

(製法)

(2)、(3)、(4)、(5)、(8)を混合してケン化反応を行ない、(6)、(7)を混合溶解させた後遊離アルカリの調整を行なった後、(1)を混合する。(9)、(10)を混合し冷却固化させ切断乾燥後、型打ちする。オーバー様のかがやきを有する透明石鹸を得た。

(以下余白)

実施例 10 化粧水

	(重量%)
(1) ポリエステルポリメチルメタクリレート層状粉末	10
(2) グリセリン	10
(3) 精製水	79.5
(4) シ・糖モノステアレート	0.3
(5) 香料	0.2
(6) 青色1号	0.02

(製法)

(3)の1部に(6)を溶解させる。(3)の残部に(4)、(2)、(5)を溶解させ(1)を分散させる。点在するオパール光沢を有する化粧水を得た。

(以下余白)

実施例 11 ボディローション

	(重量%)
(1) ラボナイト	3.0
(2) 精製水	68.88
(3) 1、3ブチレングリコール	5.0
(4) シ・糖モノステアレート	0.3
(5) 塩化ナトリウム	0.1
(6) 青色1号	0.02
(7) 香料	0.1
(8) ポリエステルポリオレフィン層状粉末	1.5
(9) ポリビニルアルコール	1.0
(10) 防腐剤	0.1
(11) エチルアルコール	5.0

(製法)

(2)の一部に(1)及び(5)を添加し加熱してゲルをつくる。別に(2)の一部に(10)を溶解させ(11)で潤滑した(9)を溶解させる。(2)の残部に(3)、(4)、(6)、(7)溶解させ、ゲル及びポリビニルアルコール溶液を加え均一に混合する。(8)を添加し均一分散させ容器に充填し事により塗付した時に点在するオパール光沢を有するボディローションを得た。

実施例 12 タルカムパウダー

	(重量%)
(1) タルク	60
(2) ポリエステルポリオレフィン層状粉末	3.9
(3) 香料	1

(製法)

(1)、(2)を混合し、これに(3)を均一に噴霧し賦香した後、篩を通し、容器に充填する。

(以下余白)

実施例 13 (ハイライター)

	(重量%)
(1) タルク	30
(2) マイカ	20
(3) ポリエステルポリメチルメタクリレート層状粉末	10
(4) 流動パラフィン	3.9
(5) 香料	1

(製法)

(1)、(2)、(3)を混合し、(4)、(5)を混合したものの中へ添加、分散する。目の下やまぶたのくすみを抑えるオパール光沢を持つハイライターを得た。

特許出願人 株式会社 寶生堂

昭和57年10月6日

特開昭58-177911(7)

特許庁長官 若 杉 和 夫 殿

1. 事件の表示

昭和57年特許願第 60726 号

2. 発明の名称

化粧料

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

住 所 東京都中央区銀座7丁目5番5号

名 称 (195) 株式会社三友堂

代表者 山 本 吉兵衛

4. 補正命令の日付

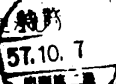
昭和57年7月9日(発送日同年7月27日)

5. 補正の対象

明細書の発明の詳細な説明の欄

6. 補正の内容

明細書第7頁の浄書(内容に変更)



は、前記の各種ポリマーをフィルム状に多層に重ねたもので、その層の数は、任意に選ぶことができるが、例えば100～300層であり、その厚さは10～50μである。

本発明においては、前記多層状に重ねたポリマーを細断して所定の大きさにした粉末が用いられる。細断する方法としては、たとえば、ベキュームプレート上にフィルムをのせてパンチングによりカットする方法がとられる。

前記本発明の粉末の粒径は任意に選ぶことができるが、例えば長径及び短径が0.05mm～1.0mmの角、円形、その他の粉末であり、常に粒径の幅が狭い一定範囲のものを得ることができる。

本発明において用いられる前記多層状に重ねた板状ポリマーの粉末は、市販のものから入手することも可能であり、たとえば、マール社(Mearl Co., LTD)製のスターライトグリッター(STARLITE GLITTER)が挙げられる。

前記多層状に重ねた板状ポリマーの粉末を前記透明化粧料基剤に配合する方法は、化粧料粉末の